

ぬいぐるみの存在

—擬人化した動物型愛玩生活財—

草野 桃子

[指導教員：武庫川女子大学教授 森田雅子]

キーワード：ぬいぐるみ、生活文化、玩具

1. 研究の背景

私はぬいぐるみが好きである。幼い頃から身の回りにいて、ぬいぐるみのいない生活を過ごしたことがない。ぬいぐるみが人格をもつと感じ、生活を共にすることに違和感がなく育ってきた背景が私にはある。実際にみてみるとぬいぐるみは販売されているだけでなく、ディスプレイとして目を引くものの、スマートフォンのアプリの中でまるで生きているようなもの、着ぐるみ、絵本や映画に主役として登場するものなど多種多様なかたちで存在している。またぬいぐるみは原始的な玩具から様々とかたちを変え現在まで生き続けていることから、ぬいぐるみというものが人々の生活の中で不要なものではなく、何かしら必要であったことが窺える。ぬいぐるみと人とのつながりを持ち、生活をしているとも考える事ができる。そんなぬいぐるみの存在が気になり、その起源や一生、在り方を考え、人との繋がりを通して、現代におけるぬいぐるみの存在意義を探りたい。

2. 研究目的

ぬいぐるみといっても、その形態は多種多様である。本研究では人との関わりからぬいぐるみの存在意義を探るために、ぬいぐるみについての見解が述べられている文献を参照し、ぬいぐるみを定義し、その定義を検証しつつ、ぬいぐるみの系譜や一生、在り方を調査し、ぬいぐるみの実態を明らかにしていく。ぬいぐるみは玩具、おもちゃ、玩具、インテリアなど様々な捉え方があるので多角的に見ていく必要があると考えている。また、ぬいぐるみを主体とする企業や団体、ぬいぐるみを取り扱う機関などからもみていく。ぬいぐるみをもつ人にインタビューをし、人との関わりをみていく、さらにぬいぐるみと実際に暮らすという面、生活行動の中でどの時に関わるのかをみるための調査も必要である。

ぬいぐるみをただのおもちゃ、玩具として扱うのではない。比較的安価で年齢や性別を問わない、特別な資格や技能を必要とせず、誰もが触れることのできる、所有者の生活環境に適応し、その存在を自在に変えることのできる、擬人化した動物型生活財であると定義し、現代におけるぬいぐるみの存在意義を探りたい。

3. 調査内容

文献調査はぬいぐるみの定義検証や系譜を中心に 150 件ほど調査した。ぬいぐるみというのはとても曖昧な存在であり、おもちゃ、人形、玩具などの一種として挙げられることが多

い。そこで本研究では、文化史、人形史、玩具史の分野を中心にぬいぐるみの系譜や付与する効用、擬人化した動物の事例を調査した。また、ぬいぐるみの系譜に関連して調査した。特に業界誌として明治 36 年（1903 年）から刊行している『東京雑玩具商報』（明治 36 年（1903 年）4 月 20 日～）、『東京玩具商報』（大正 13 年（1924 年）4 月 10 日～昭和 18 年（1943 年）3 月 1 日）、『玩統會報』（昭和 18 年（1943 年）4 月号～昭和 21 年（1946 年）1 月号）、『玩具界』（昭和 21 年（1946 年）2・3・4・5・6 月合併号～昭和 23 年（1948 年）9・10 月号）、『東京玩具商報』（昭和 25 年（1950 年）10 月号～昭和 28 年（1953 年）12 月号）を閲覧し、ぬいぐるみに関する記事や広告を中心にまとめた。そのために「ぬいぐるみ」「おもちゃ」「人形」「ペット」「玩具」などをキーワードに論文や著書、インターネットの検索、新聞などを参考文献とし、ぬいぐるみの系譜を中心に、効果、擬人化した動物の事例を調査し、研究を進めた。

フィールドワークは表 1 のように実施し、ぬいぐるみの一生を中心に調査した。

表 1 フィールドワーク一覧（草野作成 2014）

日にち	時間	場所	目的
2013年6月25日(火)	10:30~19:45	神奈川県横浜市	UNAGI TRAVELのツアー取材と同行
2013年7月2日(火)	15:00~16:00		保育参観
2013年7月9日(火)	15:00~16:00	武庫川女子大学附属幼稚園	保育参観
2013年7月12日(金)	14:00~15:00		保育参観
2013年7月24日(水)	10:00~12:00	武庫川女子大学附属幼稚園	参加観察
		ららぽーと甲子園	
2013年9月30日(火)	12:00~	ラウンドワン三宮店	景品としてのぬいぐるみ
		ナムコ三宮店	
2013年10月3日(木)	13:00~14:00		
2013年10月7日(月)	11:00~12:00	Today is...西宮ガーデンズ店	ぬいぐるみ販売店での定点観察
2013年10月23日(水)	11:30~12:30		
2013年10月21日(月)	10:00~12:00	西宮西部総合処理センター	ぬいぐるみの処分
2013年11月4日(月)	11:00~14:00	兵庫県自動車学校 西宮本校内	にきた・フリーマーケットの観察
2013年11月17日(日)	11:00~12:00		
2013年11月18日(月)	12:30~13:00	門戸神社東光寺	ぬいぐるみの処分(人形供養)
2013年11月19日(火)	14:00~15:00		
2013年12月1日(日)	14:00~15:00	曹洞宗葛城山宅原寺	ぬいぐるみの処分(人形供養)
2014年3月6日(火)	10:30~14:00	神戸メリケンパーク	フリーマーケットの観察
2014年5月18日(日)	12:00~14:00	大阪万博記念公園	フリーマーケットの観察
2014年6月8日(日)	14:00~15:00	西宮西部総合処理センター	子どものフリーマーケットの観察
2014年6月10日(火)	13:00~14:00	横浜人形の家	ぬいぐるみの系譜の調査

ぬいぐるみインタビューとぬいぐるみ日記は 7. 8. に記述するように実施した。

4. ぬいぐるみの定義

本研究におけるぬいぐるみの定義を検証していく中で、ぬいぐるみに関して述べられている発言や見解を調査した。しかしぬいぐるみの多様性からぬいぐるみを一概に定義することは困難であった。大きさなどは問わず、インタビューの際は所有者がぬいぐるみだと思うものはぬいぐるみとし、生活

環境に寄り添う生活財とみなし、調査では様々な手法を用いて、ぬいぐるみの特性を検証していく。

本研究ではその形態を布で覆われ、中身が綿等のクッション性のある素材を詰めたものであり、目鼻口手足がある動物型（で擬人化できる）の生活財とする。そして、ぬいぐるみには特性として愛玩性があるということを仮説とする。所有者によって在り方を変化させ、生活に自然と入り込んでいくことができるものである。所有者によって位置づけが異なり、半永久的に存在することができる。生活財でも壊れてしまったら捨てるというのではなく、布で出来ているため燃えない限りは縫い直す、継ぎはぎをするなどをして持ち続けることができる。

5. ぬいぐるみの系譜

本研究において、ぬいぐるみの歴史を紐解いていくことは重要な観点である。私はぬいぐるみの系譜には土着と舶来の融合であり、2つの側面があると考えている。1つは明治期の開港による舶来品として輸入されたか、持ち込まれ日本に根付いたということ、2つはぬいぐるみの素地となるものは日本にも存在していて、元々ぬいぐるみらしきものはあったということである。ぬいぐるみの系譜は以下の様に考えた。

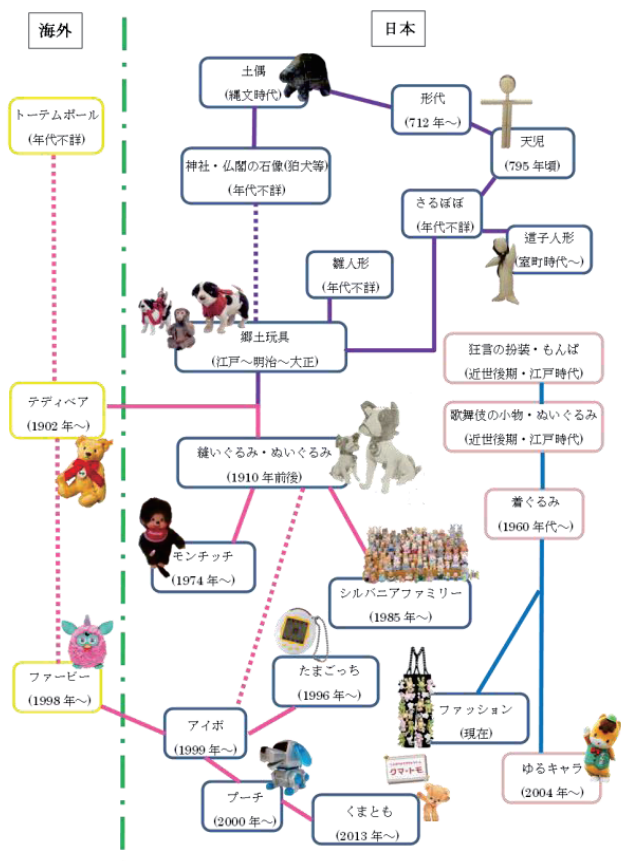


図1 ぬいぐるみの系譜（草野作成 2014）

今のようなぬいぐるみの直系の祖先はテディベアであり、その原型や素地は郷土玩具や這子人形などにあると考えた。素材や対象者の変化もある。これは大衆化によるものであると考えられる。ぬいぐるみの祖先である土偶などは呪術的な要

素をもち、祈りを込めたものであったが、テディベアとして登場するまでに呪術的要素はかなり薄れ、悩みや不安を吸収してくれる見守ってくれるものになったのではないかと考え、お祈り要素から見守り要素に変化したことも重要な事であると考えている。

6. ぬいぐるみの一生

本研究ではぬいぐるみの一生を、ぬいぐるみが人の手にとられ、生活を共にし、別れていく流れを一生とし、図2の様に考えた。ぬいぐるみと人との関わりをみているため製造過程は含めず、人の手にとられてからをぬいぐるみの一生の始まりとし、生活を共にし、別れていく、そして最終的には資源としてもう一度生活の中に戻ると考えた。

この調査でぬいぐるみをみてきたが、形が整っているものがほとんどで、処分する理由があるとすれば、必要でなくなった、嫌な思い出があるなどが考えられる。ぬいぐるみは明確な使用用途がなく、その存在の所有者によって決まるため、ぬいぐるみの一生を見ていくことはぬいぐるみと所有者との関係性もみることができると考えられる。

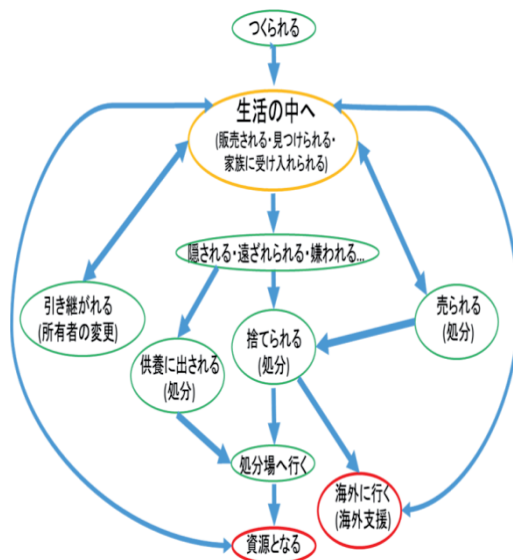


図2 ぬいぐるみの一生（草野作成 2014）

ぬいぐるみの一生は循環しており、最終的に処分され燃やされたとしても資源となり、人間の生活の中で活躍をする。作られ、販売され、人に買われ、その人が所有者となり生活を共にする。

ぬいぐるみには正確な使用期限が存在しない。燃えない限り、洗濯すれば清潔になる、破れても解れても縫い直すことができる。そのためぬいぐるみを処分するというのは所有者の選択によるものであり、ぬいぐるみの一生は所有者に委ねられている。この調査では、形が整っているものがほとんどで、処分する理由があるとすれば、必要でなくなった、嫌な思い出があるなどが考えられる。ぬいぐるみは明確な使用用途がなく、その存在の所有者によって決まるため、ぬいぐるみの一生を見ていくことはぬいぐるみと所有者との関係性もみることができると考えられる。

7. むいぐるみインタビュー

人とむいぐるみの関わりを知るために 2014 年 2 月 16 日から 12 月 15 日までに 21 名（＋犬 1 匹）の方にインタビューに協力していただいた。対象者は兵庫県、大阪府、岡山県、広島県、山口県在住の人であり、年齢や性別関係なく、インタビューに同意、協力してもらえる人に自分が声を掛けることのできる人へのインタビューとなったため、20 代女性が多く、男性は少ない結果となった。

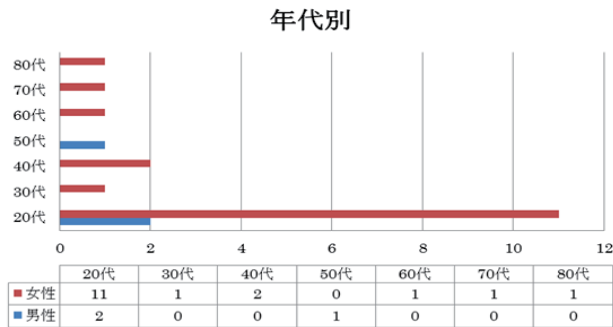


図 3 インタビュー対象者の性別年代（筆者作成 2014）

所要時間は 20 分～40 分でむいぐるみの実物が写真を持参していただき、それを元にインタビューを進めていった。

むいぐるみインタビューから、むいぐるみについてのエピソードは誰もが持っていて、思い出があることがわかった。むいぐるみが対象者と他者とを結ぶ思い出装置、思い出媒体とも考えられるものであった。性別でみると女性はむいぐるみを友達として見ている人もいたが、男性は収集のひとつとしてむいぐるみがいることがわかった。これは対象者が思い入れのあるむいぐるみを提示したとき、女性は昔から持っているものや買ってもらったものなど提示するが、男性はゲームでとったむいぐるみと提示することがほとんどであったためである。所有者がむいぐるみを生活領域のどの位置にもどの場所に置いているのかということも重要であると考えた。

ここではインタビューの中から T さんの事例を提示する。T さんは山口県在住の女性 76 歳主婦の方で、5 体のむいぐるみの中からゴリラについてインタビューを進めた。ゴリラは 10 年以上前に人からもらったもので、もらった当初は居間に置いていた。いま現在は 2 階の納戸となっているところの明るいところに T さんが手編みで作ったサルのみいぐるみと一緒に置いている。御主人が亡くなったのを機に邪魔になるということで 2 階へ持って行った。

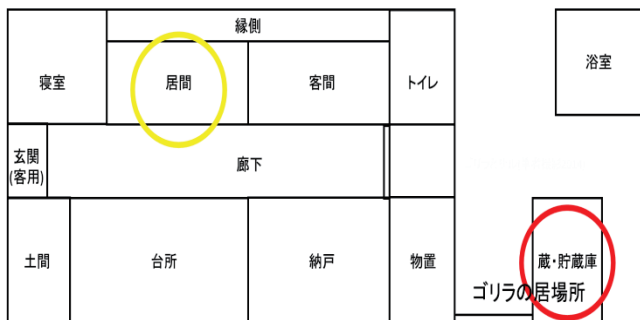


図 4 T さんの家の平面図（筆者作成 2015）

T さんの家は平屋であり、浴室や蔵のようなものが外にある。ゴリラの居場所は居間にいたゴリラが現在は蔵や貯蔵庫となっているところのロフトのような 2 階のところに T さんが手編みで作ったサルのみいぐるみと一緒に置いている。2 階でも陽の当たるような場所にむいぐるみを置くこと、ゴリラだけでなくサルも一緒に置くことはゴリラが寂しがらないようにしていると考えられる。

この調査から、むいぐるみをもっていなくてもむいぐるみとのエピソードはあり、昔は持っていたなどからもむいぐるみを持っていたが何かをきっかけにして離れていった場合も散見された。

8. むいぐるみ日記

むいぐるみ日記はむいぐるみと所有者が一日の中でどのように接しているのか、むいぐるみがどのような存在として生活の中にいるのかをより詳しく知るために Andy Alaszewski『Using Diaries for Social Research（日記による社会学調査）』の社会学的手法を参照した。調査期間を 2 週間とし実施した。6 人に協力していただいた。この調査ではむいぐるみと所有者の生活時間での関わりを読み取ることができ、むいぐるみが生活の中に存在していることがわかった。

調査対象者は関西在住の 20 代の女性が 5 名、男性 1 名となった。当初は年齢や性別に関係なく、自分の知っている人に声をかけ、協力をしていただける方にするというかたちで実施していく予定であったが、女子大生がほとんどとなった。調査対象者のほとんどがむいぐるみに興味が薄い人が多かったが、むいぐるみに興味関心がない人でも生活の中でむいぐるみと接していることがあり、生活の中でむいぐるみはコミュニケーションをとる時、商品として扱う時、テレビを見ている時、寝る時、外出をした時、仕事の時など様々な場面で生活の中に登場していた。むいぐるみが興味の有無に関係なく生活のどこかで関わっていることがわかった。また、ペットがいる対象者が 4 名いたが、ペットと遊ぶ時に使うものとしてむいぐるみを触る機会が生活の中にあり、コミュニケーションツールのひとつとして存在していること、またペット自身もむいぐるみ代わりになっているとの意見もあった。調査から、生活の中で興味の有無に関係なくむいぐるみに接する機会があり、ペットとむいぐるみとの同一性が、人とむいぐるみとの関わりに関わりの影響を与えているのではないかと考えられる。

9. むいぐるみをみてきて

本研究ではむいぐるみを対象とし、むいぐるみの一生をフィールドワークを中心に最初に取り組み進めていき、むいぐるみの元となるものが日本にも存在していたのが気になりむいぐるみの系譜に着手した。それと並行してむいぐるみのインタビューではむいぐるみと所有者の関係性を見ていき、むいぐるみ日記では生活の中でむいぐるみが所有者にとって

どのような存在として成り立っているのかをみていき、ぬいぐるみが現代の生活の中で人々にとってどのような存在意義をもち存在しているのかをみていくことを目的とし調査を行った。

9-1 ぬいぐるみの変化

ぬいぐるみは時代と共に変化していった。それは形態や素材だけではなく、持つ人やその要素も変化していき、今現在までさまざまなかたちで存在している。

業界誌の調査からも明らかな様に、素材の変化はぬいぐるみがいまのようなかたちになるには重要な点である。土から紙になり布になる。布でも動物の毛並みに近づけ、子どもが持つても危なくないような素材になるなどの変化がある。素材は固いものから柔らかいものへと変わった。形態の変化にも繋がることであるが、動物本来の姿、犬であれば四足歩行、座位などがほとんどであったが、素材が柔らかくなっていくにつれてぬいぐるみの形態が二足歩行、手足が自由に動くものなど、人間がするような動きが出来るように改良されていき、後にはファービーやアイボのように音に反応して動いたり話したりするようなものになり、今では画面上で本当の友達のように会話をしていくものも登場する。

持ち主の変化も挙げることができる。以前はぬいぐるみを持つことができたのはある程度の階級にあるような人は持てるものであり、価格も高価なものであった。地方の方では手芸的なものでぬいぐるみはあった可能性があるが、百貨店や商店で買うようなものはなかなか入手困難なものであったと推測できる。

いまのようなぬいぐるみになるまでには、土偶や這子人形、形代は呪術的なものであり、人や幼児の身代わりとして存在し、持ち遊ぶものとして存在していたわけではない。その後、郷土玩具が各地で誕生するが、商品的でありながらも魔除けや子孫繁栄などの意味が含まれている。それ以降にディベアが明治末期頃に日本にやってきて、呪術的要素は薄れていき、子どもの近くにあるようなものへとになっていき、いままでは掌の中にぬいぐるみが存在するようになる。

ぬいぐるみは時代の変化と共にその形態や要素を変化させていき、その時代の風潮に合わせて存在してきた。ただ、いまのようなぬいぐるみが登場した 1900 年代には子どもの友達として子供部屋やおもちゃの一つとして考えられていたことは確かである。

9-2 現代におけるぬいぐるみの存在

ぬいぐるみが生活財かつ愛玩性を含むには動物型であることが重要である。古くから犬や猫がペットとして存在していたように、人と動物の関わりは深く、ぬいぐるみの形態の中でイヌやクマの形が多いことも関係してくることであると考えられる。動物の怖い部分と考えられる、噛む、吠えるということもぬいぐるみにはない。燃えない限り持ち続けることのできるもので死なないという安心感がある。ぬいぐるみは人間

が動物と触れ合う上で困難な部分を極力取り除いたものとも考えることができる。ぬいぐるみは人と関わりながら変化をしていき、ぬいぐるみが目や鼻口手足などがあることで魂が宿っているように感じるか、関わっていくにつれて愛着がわき魂が宿るのか、その形態が擬人化や愛玩に繋がるものであると考え、深いニーズにも繋がるものと考えられる。本研究では現代におけるぬいぐるみの存在意義を探ることを目的としていた本研究の調査からみえたことである。ぬいぐるみが擬人化した愛玩生活財で人との関わりによって成立することであり、所有者とぬいぐるみとの物語や思い出が擬人化や愛玩性の濃淡をつけていく。現代におけるぬいぐるみの存在意義にも繋がるものであると考える。

参考文献（抜粋）

- 1) 増淵宗一：日本女子大学紀要文学部 38,99-109,1988,
ぬいぐるみと子供たち[1]:その文化図像的考察,
- 2) 久保田聡子：日本女子大学文化学会文化学研究(14),
40-57,2005,「シュタイフ社製日本限定ディベアに見る、日本人のぬいぐるみ文化」
- 3) 谷敬：【縮刷版】大衆文化事典(ぬいぐるみ), 弘文堂, 594, 1993
- 4) 新村出編：広辞苑第六版(ぬいぐるみ), 岩波書店, 2156, 2008
- 5) 増井金典：日本語源広辞典[増補版](ぬいぐるみ),
ミネルヴァ書房, 826, 2012
- 6) グレン・ネイブ：ぬいぐるみさんとの暮らし方, 新潮社, 1989
- 7) 増淵宗一：かわいい症候群, 日本放送出版協会, 1994
- 8) 四方田犬彦：かわいい論, ちくま新書, 2006
- 9) 新井素子：わにわに物語, 講談社, 256-263, 1992
- 10) 新井素子：くますけと一緒に, 中央公論新社, 265-280, 2012
- 11) 井原成男：長野大学, 1984 年 8 月 19 日に板橋区立美術館において講演したのを文章化,
子どもの発達と絵本・ぬいぐるみから絵本の世界へ
- 12) 東京玩具人形問屋協同組合東京玩具人形問屋協同組合トイジャーナル編集局：Toy journal archive=トイジャーナルアーカイブ：トイジャーナル創刊 1200 号記念, 01(1903.4-1943.3), 02(1943.4-1948.10), 03(1950.11-1964.12), 2011
『東京雑玩具商報』(明治 36 年(1903 年)4 月 20 日～)『東京玩具商報』(大正 13 年(1924 年)4 月 10 日～昭和 18 年(1943 年)3 月 1 日)『玩統會報』(昭和 18 年(1943 年)4 月号～昭和 21 年(1946 年)1 月号)『玩具界』(昭和 21 年(1946 年)2・3・4・5・6 月合併号～昭和 23 年(1948 年)9・10 月号)『東京玩具商報』(昭和 25 年(1950 年)10 月号～昭和 28 年(1953 年)12 月号)
- 13) MARK NIXON:MUCH LOVED,Harry N.Abrams,2013
- 14) Andy Alaszewski:Using Diaries for Social Research,
SAGE Publications Ltd, 66-83,2006